

---

# エレメンタル・バスターズ

春奈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エレメンタル・バスターズ

### 【Nコード】

N9734T

### 【作者名】

春奈

### 【あらすじ】

この物語は別世界からコノ世界へと来て、間違いを正す物語。

この世界に住んでいる者達は”彼女”のせいで忘れている…『己』を。

何度も同じ行動を…、日々を繰り返し、それに気づかないと言う矛盾。

王でさえ、王女でさえ、何も気づいていないと言うのだろうか？  
そして、どこからか舞い降りた無力なる者が織り成す間違い探し物

語。

## 第∞日目 世界の在り方

この物語は別世界からコノ世界へと来て、間違いを正す物語。

この世界に住んでいる者達は忘れている：『己』を。

何度も同じ行動を：、日々を繰り返し、それに気づかないと言う矛盾。

王でさえ、王女でさえ、何も気づいていないと言うのだろうか――  
―？

――そして、どこから舞い降りた無力なる者が織り成す間違い探し物語。

それではこれから貴方に幾つか質問致します。

？あなたなら修正ペンで何を修正しますか？

？消しゴムで消せば何もかも消せると思いますか？ YES／NO？

？嘘は本当にバレないと思いますか？ YES／NO？

――貴方はこの質問の意味を理解出来るでしょうか？

答えは物語の中に、きっとあるでしょう。

さあ、あなたに簡単に少しだけ教えてあげましょうか。

これから始まるうとしている物語の世界を。

十デイスティニイ・エルシオン：それは天界（天国）を指す。

地上に暮らす者達は、エルシオンを天国や楽園と言い表している。

そこには、五神将ごじんしょうと言う神が五人おり。個々に城を構えている。

神より地位が低い所に、天座あまざと言う天子の長であり、女王の。天子がいる。

その天子の女王が略<sup>ほぼ</sup>エルシオンを支配していると言っても過言ではない。

＋アウター・アビス：それは下界（地獄）を指す。

地上に暮らす者達は、アビスを地獄や魔界と言い表し、忌み嫌っている。

呪、毒、悪、殺やら陰悪な噂が絶えない。

アビスには、王様が存在し。アビスの世界を取り仕切っている存在。

アビスの中心部に城を構えており王様は、とても朗<sup>ほが</sup>らかで子供っぽくてサディスティックだと

悪魔達から噂されている。

＋セカンド・サン：それは地上を指す。

普通の人間が生活をしている場所。けれど極稀<sup>ごくまれ</sup>に、魔力を持つ者が存在する。

魔力持つ者は、普通の人間達から『法術師』や『神父』と呼ばれている。

だが、普通の人間は知らない種族がある。

それは、『竜族<sup>ドラゴン</sup>』と『長耳族<sup>エルフ</sup>』と『大神族<sup>オオカミ</sup>』だ。

この三種族は昔『神ノ使』と言われ、崇められていたが、ある事が原因で次第に人々の頭から

忘れ去られて行くのであった。

——そしてセカンド・サンでは昔、アビスとエルシオンの戦争で1度滅び、名を変えた。

本当の名を知っている者は、もう存在していないだろうか？

＋エレメンタル・ワールド：それはこの三つの大地を維持する為の土台（星）を指す。

エレメンタルは基礎を示し。ワールドは世界を現す。

＋そして：人間界。簡単に言ってしまうえば地球。もっと細かくして言う和日本。

エレメンタル・ワールドには存在しない別次元。アウトワールド

日本では、魔力も剣術も法術も無い平和な場所？

戦争は昔に何度か合ったものの、今は平和になっている。

この日本では、アビスの王のような綺麗で可憐な黒髪と黒目の人間がメジャーである。

――そして彼が現れる前のエレメンタル・ワールドの時は、動いてはいなかった。

簡単に言えば、日数や時間は経過しているが、同じ行動を何度もループしていることになる。

何も知らずに『――ずっと平和が続く、だからこのままで良いんだ』ゴトジユツと言う強い言術に

かけられている者達は、”今”から変わることなどしようとは思わないのだろう…。

例えば目の前で人が殺されようとも…。

少しはこの世界を、わかりましたでしょうか？

ですがこの情報は、ごく最近の物に過ぎないのです。

もっと過去を知りたいのなら、この物語に飲み込まれる覚悟をお決め下さい。

…？私は誰か…ですか？あなたに助けを求めている悲劇のヒロインとでも

言っておきましようかね？

…、解からなくて良いのです。あなたにとって損は無いことだと思いますし。

それに私と話している時点で、あなたの未来の変化は免れ<sup>まぬ</sup>ない運命<sup>さだめ</sup>なのです。

それでは過去を知りたければ、そのページをおめくり下さい。

## 第∞日目 世界の在り方（後書き）

これは、とある人間の夢の中のお話。

夢は続く…、夢は現実へと導き、やがては幻想を作る。

彼が望もうとも、望まざろうとも…。



## 第∞日目 二度と来ない朝（前書き）

これは…エレメンタル・ワールドの過去のお話。  
当時、エルシオンとアビスが戦争をする頃の”少女”のお話。

## 第∞日目 二度と来ない朝

遠い昔：天国エルシオンと地獄アビスでは、小さな意見の食い違いで  
険悪な雰囲気エルシオンを漂アビスわせていた時代。

その頃、天国エルシオンと地獄アビスの間にある地上では  
険悪な雰囲気など知らず、日々を楽しく過ごしていた。

——時に天国の怒りのせいで、天から皮膚を焦がすような雨ようがんが降  
り注ぐ時も合った。

——時に地獄の憎しみのせいで、地から気をも惑どくわす空氣が噴き  
出て来る時も  
あった。

けれどもその地上で暮らす人々は負けなかった。  
『大丈夫…きつとまた平和になるさ』と自分に言い聞かせながら。

けど、平和なんて来る事は無かった…。  
永遠と言う命を持つ天国と地獄に住む住人達にとって、1年なんて  
数秒のことだったのだ。  
地上で住む者達が、ほんの数秒苦しむくらい気になどしなかったの  
だ。

そんな憎しみと怒りが飛び交う地上に、望まれて生まれ、愛され  
て生きている少女がいた。

その少女は、物心ついた時から  
『ずっと平和な世界で、ずっとパパとママと一緒にいられますよう  
に！』と天に祈りを捧げていた。

けれど、そんな想いとは裏腹に——…

太陽が沈み、月が昇り、少女はいつものように外へ出て、地に足をつけて祈りを捧げていた。

そんな時――！

天から無数の赤く煌く（きらめ）塊が、降って来たのだ。

家の窓から少女を優しい瞳で見つめていた、男性がその塊に気づき、少女の元へと急いで向かった。

そして少女の腕を強く掴み、『早く家に入りなさい！！』と怖い顔をして焦りながらそう言った。

少女はそれに驚いて、急いで家に戻った。

家に入った途端に、怯えて顔を歪ませている少女の母親が強く少女を抱きしめた。

そして何度も『大丈夫よ：大丈夫よ：』と呪文でも唱えているように言っていた。

その腕は小刻みに震えていて、少女は人間の本能的に恐怖を憶えた。

遂に、赤い塊が地へと降り立ち、家々は燃え盛っていった…。

ある者は『熱い！熱い！！』と叫びながら走り回っていたが、直に塊に押し潰されて逝った。

ある者は『怖いよう：怖いよう：』と言いながら傍らに横たわる死<sup>は</sup>体に問いかけていた。

気づけば少女の家も、真赤な炎に包まれていた。

怖い顔をした男性、父親が少女と母親の腕を強く掴み立たせ『逃げるぞ！早く！』と言いながら、

携えた剣を強く握りしめていた。

少女と母親と父親は逃げた。必死に逃げた。母親は少女の小さな手を強く握り締めて。

父親は1番後ろを走り、少女と母親の背中を守った。

少女は息を切らしながら必死に走った。目頭が熱くなり少女は自分が泣いていることに気がついた。

友が死んでいく、隣人が朽ちていく、動けない犬や羊や牛や豚が燃えていく…。

少女が一瞬後ろを振り返ると、後ろからドロドロとした赤い液体が迫って来ていた。

逃げた…必死に…必死に。

けれど少女は気がついた、母親に腕を引っ張られていて気づかなかった事。それは…。

『――父親<sup>パパ</sup>がいない。』

――そして赤い塊が降って来た時から1年後。

無事に少女と母親は逃げ切れたけれど、失ったモノは大きすぎた。

母親はショックで、あの事件から一ヶ月ずっと泣き続けていたと言う。

けれど少女は、不思議と涙が出なかった。その母親を見ていると不思議と客観的になった。

そして少女は考えた『何故あんなことが起こったのか?』と。

それは1年と言う月日がたっても、解かることは無かった。

1年の間、他の村や街でも塊が降ったと言う。

遂に、研究者や有能な法術師が集って話し合ったけれど、解決策は出ず。

人達は嘆き悲しんだ。

けれど少女は不思議と前向きに生きて行けた。一緒に逃げた母親がいたから。

新しい場所でも、すぐに友は出来て大人にも可愛がられた。

時に大人達の口から『可哀想に…』と言う言葉が聞こえたが、少

女は意味が解からなかった。

そして今夜も少女は強く祈りを捧げた――。『ずっと平和な世界で、ママとずっと一緒にいられますように！』と。

次の日の朝。1番仲が良かった友達が原因不明の病で倒れた。

その友達は、倒れたその瞬間から声を失い、光を失った。しりよく

次の日…、また1人…また1人と倒れていった。

遂に医者までもが病の淵に落ちていつてしまった。

そして病では無い者は、見えないモノに恐怖し、段々と気が狂っていった。

少女と共に逃げた母親も、見えないモノに怯えて、少女に暴力を振るってしまったのだ。

けれども少女は耐えた。だって大好きな人だったから。少女を守ってくれた大切な

――最後の人だったから…。

朝を…夜を…繰り返す内に、人々は狂って行き、死んで行った。そして遂に少女と共にいた母親が、手首から血を噴出しながら死んで逝った。

女性の右手には鋭い刃が握られていた。少女はそれを見てグラリと視界が歪んだ。

『母親・…？』ママ

少女は全てを失った。父親も母親も…。

友でさえも生き残っている者は、いなかったのだ。

――そして、少女は願った。神を呪うような憎しみを秘めた瞳で。『わたしは”神”が嫌いです。わたしは”全て”が嫌いです。だから死んで下さい』と。

全てを失った少女に迷うことは何も無かった。ただ終焉を待つだけの少女。

その祈りは果たして”神”に届いているのだろうか？

全てを失った少女は、”神”にも同じ気持ちを思い知ってもらいたいと強く願った。

そんな少女を見つけたのは、教会の神父だった。

その神父は、優しい瞳と声色で『おいで』と言って、暖かく手を差し伸べた。

少女は冷たい目と声色で、『ありがとう』と言って、1度も顔を合わさずに手をとった。

何故、少女が神父の手をとったかは、不明のまま。

もしかしたら、少女はまだ『光』を信じていたのかもしれませんが。

そして少女は、教会で同じ境遇の子達と一緒に暮らすこととなった。

教会は、一軒家をちよつと大きくしたくらいの屋根裏付きの教会だ。天井の隅には、蜘蛛の巣が幾つか合った。

教会を入るとすぐに、左右に横に長い椅子が4個づつ置いてあって目の前には、大きな十字架を手で握り締めている女神像が合った。その女神像の裏に行くと、そこにはリビングやら、台所、お風呂とトイレがあった。

そして少女の母も父もいなかったが、その生活には温もりが合った。

同じトラウマを持つ子達と優しい神父。少女は次第に笑顔を取り戻して行ったのだった。

2年後…少女は齡10歳を迎えようとしていた時――。

その日は、楽しい日になるはずだった。最高の1日になるはずだった――。

教会には、少女の帰りを今か今かと待つ神父と仲間達。

帰れば、熱々でちよつと黒胡椒の掛かったローストチキンに、白く甘い生クリーム仕立ての誕生日ケーキ。そして綺麗な赤いリボンでラッピングされた誕生日プレゼント。

けれど、天から：地から：現れた悪魔と天使達。

その手には鋭いモノ。怒りに満ちた天使の瞳。憎しみに満ちた悪魔の瞳。

『——ああ、彼らは昔の私にそっくりだ。そうか、彼らが私の大切な人を……。』

少女は燃える教会を見た。少女は教会から出て来る者達が無残に殺されて逝くのを見た。

少女は友を殺している者達を睨んだ。

再び少女は、あの頃の想いが蘇よみがえった。燃える赤いリボンの付いた箱。

燃える一緒に過ごした教会。

憎すぎて、どうしようも無くて、少女はただ呆然と立ったまま思った。

『くだらない』

少女はそう思った。すると不思議と少女は笑えて来たのだ。

ああ、くだらない：くだらない。と少女は狂ったかのように笑い続けた。

天国と地獄の小さな喧嘩だと言うのに。

何故私たちが巻き込まれなきゃいけない？と少女は思った。

全てを理解し、結論を出した少女は、もう少女ひとでは無くなっていた。

『嗚呼、目の前で人が死んでゆく。嗚呼、目の前で誰かがモガキ苦しんでいる。——滑稽こっけいだ』

そして少女の後ろには、真っ白い翼を持った狩人が——…。

…少女は最後に願った。自分で叶える願いを。

『時が動くから人は動く。感情があるから人は喧嘩をする。だった  
ら無くしてしまえば良い。

私に従え。私の言う通りにしろ。もう何も感じるな、想うな、動く  
な。そうすれば

”ずっと平和”…だ。』

——そして時は止まったのであった。



## 第∞日目 二度と来ない朝（後書き）

——全ては少女の想うがままに——

## 第1日目 平凡で平和で（前書き）

別世界…、地球…、日本に住む1人の『クダラナイ』お話。

## 第1日目 平凡で平和で

――・・・。

「…ふーん。何か結構残酷な内容だね？」

ふーんと興味無さそうに答える1人の女。

薄茶のショートヘアで、大きい黒目が印象的な女。

「なんだよ…、せっかくお前の好きそうなジャンルの小説探してやったのに」

不機嫌そうに言った男。右手に持っていた携帯をパチンツと閉じて女を睨んだ。

男は黒髪ショートで、男にも関わらず大きくて綺麗な黒目。名前は筒巳<sup>つつみ</sup> 佐熊<sup>さくま</sup>と言う。

すると女が、眉を潜めて言った。

「まあー興味あるっちゃあ、あるけど。そろそろ試験近いんだよ？小説所じゃないでしょ」

頭をグシャグシャと掻きながら女は言った。

この女の名前は、鈴崎<sup>すずさき</sup> 凜<sup>りん</sup>と言う。

すると佐熊<sup>さくま</sup>が、目を逸らしながら言った。

「あー…はいはいそうですね、試験ですねー。(棒読み)」

若干棒読み気味で言った佐熊<sup>さくま</sup>に対し、凜<sup>りん</sup>が「はあー」と深い溜め息をついて

哀れみを持った目で佐熊を睨んだ後、教室へと入って行った。

(まったく、何だよ凜のやつ…。あーあ、女ってめんどくさいなあ…)

佐熊は頭をグシャグシャと掻きながら、不機嫌そうな顔をしていた。

――すると

「キンコンカンコン・・・」

(あっ、ヤバイ！もう授業なのか。次英語だ…最悪だ。居眠りでも

してやり過ぎそう…と）  
そんな事を思いつつ、佐熊は2年A組と言う教室へと渋々入って行った。

——この世界は、エレメンタル・ワールドとは別次元にある日本という場所だ。

この日本は至って平和で、住んでいる者達は剣を扱ったり、ましてや魔力がある者はいなかった。

たまに『占い師』や『超能力者』という者達がいるようだが、それでも魔力を持つ者は皆無に等しい。

遠い昔に何度か他国と戦争を起こしたと言うが、今は終戦して平和になっている。

そんな平和で安全？な場所に暮らす日本男児。それが『筒巳<sup>つつみ</sup>佐<sup>さ</sup>熊<sup>くま</sup>』だ。

佐熊は平凡な高校2年生で、母と父を原因不明の”事故”で既に亡くしており、11歳の妹と二人暮らし。

たまに携帯小説を書く、自評『隠れ小説家<sup>けんびだいいちこうてい</sup>』でもある。

そして今、佐熊がいる場所は、犬美第一高校<sup>けんびだいいちこうてい</sup>と言う所だ。

今年2年生になり、それなりに興味のある女子もいて、それなりに『しあわせ』な日々だった。

「Z：Z：Z：」

コツン・・・コツン・・・

段々と誰かの足音が佐熊に近づいて来る。

午前の暖かな陽気に照らされ、夏の匂いを漂わす風が、『ふわん』とカーテンを揺らしている。

——バシンッ！

「ッ！うおああ！！」「うわっ・・・」

「え？え？あ・・・先生。」

「あ・・・先生。じゃないだろう？授業中に涎垂らしながら寝る奴がいるか？」

先程の『バシンッ』と言う音は、英語の先生が佐熊の頭を教科書で叩いた音だった。

それに驚いて佐熊は驚いたが、同時に先生も佐熊の声に驚いていた。

佐熊は涎よだれ？と思い、腕で口元を拭うと、ズルッ！と腕が滑った。

顔を少し赤らめて、捲くついていたワイシャツの袖を下ろして、口元を拭いた。

「ハハハハ！佐熊！口が緩ゆるんでるんじゃないのかあ？」

と親しげに笑って来た、憎たらしい男友達。

すると英語の先生が、大きくて深い溜め息を「はあー…」と吐いた。

佐熊は心の中で。

（いささか教師が生徒の前で、こんな大きな溜め息について良い物なのだろうか？）なんて

どうでも良いことを、ぼんやりと考えてみたのだった。

人間は、恥ずかしいとか驚いた時に、どうでも良いこと細かく考える習性がある…と思うが、

それは佐熊だけだろうか？

そんなこんなで、再びチャイムが鳴った。

「キーンコーンカーンコーン・・・」

「うーん！ああー終わったあ。」

チャイムと共に、今までガツチリと集中していた生徒達が、ごまあざらしのお腹のように、ペタンと

上半身を机の上に倒した。

佐熊は、「うーん！」と背筋を伸ばし、大きくあくびをした。

その顔は、凄く眠たげな顔をしていた。

すると1人の女子が佐熊の机の前に堂々と立っていた。

「It seems to be sleepy. It returns alone because my pianos practiced today.」

驚いた佐熊は、ふと顔を上げてみると、そこには鈴崎すずさき 凜りんがいた。佐熊は、眉をひそめて顔を横に傾けた。

「え・・・えーっと、い・・・YES?」

凜はその答えに、思わず「ブッ：！あはははは」と吹いていた。すると佐熊が不機嫌そうな顔をして

「な、何なんだよ！そんなに笑わなくなっちゃって良いだろ！」

凜は笑い泣きしていた瞳を拭って言った。

「ははは・・・えっとね。眠そうな顔してるね。今日私ピアノの練習があるから一人で帰ってね」

と言って、ニッコリと微笑んだ。

すると佐熊が恥ずかしそうな顔をしつつ「最初からそう言えっ！」と強気に答えた。

凜は再び優しく微笑んで

「しいーけえーん！忘れないようにねっ。」

と言って、「じゃあね」と付け足して教室を後にした。

凜は言葉使いがちよっと荒くて、ショートヘアだから少しボーイツシュに見えるけれど、

本当は優しい性格で、おしとやかな女の子なのだ。

凜は高校生である傍ら、ピアニストでもあり、それなりに有名だった。

時刻は午後4時過ぎ。

（今日はサタンスーパーで買い物して帰ろっと）

佐熊は、窓越しに曇りかけた夕焼け空を見つめ、静かに微笑んだ。一度携帯をパチンと開き、時刻を確認すると再びパチンと携帯を閉じた。

——そして佐熊さくまは学校を後にしたのだった。

光陰こういんに閑守せきもりなし。

月日がとどまることなく、進み続ける時間。

それが果たして幸せなのか……？ 時間が流れることにより、小さくとも大きくとも

——争いは生まれる。

## 第1日目 平凡で平和で（後書き）

——光は日、陰は月の意から『光陰』は月日。  
『関守』は関所の番人のこと。



## 第1日目 寸陰を惜しむことなり（前書き）

どんなに些細な時間でも、お大事に。

——進んだ時間は”2度と”戻りはしないから。

## 第1日目 寸陰を惜しむことなり

ぞろぞろと下校時間か、列を成して歩く学生たち。

春が終わりを告げようとしている梅雨の季節。

むしむしとした暑さと、湿ったかのようなジメついた匂い。

簡単に言えば日の元に出せずに、濡れている状態の洗濯物のような匂いだ。

佐熊さくまは両耳にイヤホンをつけて、音楽プレイヤーを右手で操作した。

音量は5。風が吹くと、テレビの砂嵐のような雑音が混じった。

駅のホームに着き、少し距離のある階段を。

コツン：コツン：と登っていく。

1回だけ小さく溜め息をつくくと、丁度電車が来ると言うナレーションが流れた。

「まもなく電車が参ります。黄色い線の内側でお待ち下さい」

眠そうな顔をしながら佐熊は電車に乗り、20分くらい電車が揺られた。

電車の中では立っている人は前を向いて、景色を眺めていることが多い。

逆に座っている人は携帯を見たり、自分の足元を見たりして、視線を下に向けている所をよく見る。

『何故だろう？』

そんな些細ちさいなことを、佐熊はボンヤリしながら考えてみた。

結局人は、人を自然と嫌っているのでは無いだろうか？

余計な所を見なければ、面倒事に巻き込まれない。

けれど、そんな人達の中にも良い人はいるはず。

実際この電車に乗っている人達は、大体は良い人だろう。

——ただ面倒事に巻き込まれたく無いだけ。無責任なだけ。

そんな事を考えていたら、電車が目的地に到着した。

佐熊は『何考えてるんだ、俺』と思って、眠りそうになった目を擦<sup>こす</sup>って

電車を降りた。

駅の改札を出て、駐輪場にある自分の自転車に乗って、第二目的地の

『サタンスーパー』へと向かった。

——ウィーン

自動ドアが開くと、涼しげな冷気が体を包んだ。

夏に友達の家遊びに行ったり、スーパーまたはデパートに入る時に良くある事だ。

冷房の効いた室内。室内を出ると蒸し暑い外…。

サタンスーパーで、佐熊は卵や、お弁当のおかずになるような冷凍食品を買い物籠へと入れた。

サタンスーパーは、1階建ての中規模なスーパーだ。

お弁当売り場、魚売り場、肉売り場に端っこのスペースに小規模な本屋さん。

そして佐熊は、一通り買い物を終えると。なるべく空いているレジへと並んだ。

レジの傍には、ガムやグミ。飴の入った小袋。

佐熊は、何となく反射的に1番好きなレモン味のグミを1つポイントと籠に入れて、精算を済ませた。

そして、買い物袋を右手で持ちながら外へ出ると…。

ぶわっと、生温い風が髪をなびかせた。

（まだ6月だって言うのに、何でこんなに暑いんだろうなあ？）

そんなことを佐熊は思いつつ買い物袋を自転車の前カゴに、ゆっくりに置いた。

自転車に乗り、帰ろうと思った時。

「ピヨピヨ…ピヨピヨ…」

と、ヒヨコの着信音と共に携帯が鳴った。

背中に背負っていた黒いリュックサックを背中から下ろして、膝の上に乗せたまま

リュックサックの横に付いているジッパーから携帯を取り出した。

(ん…？凛りんからのメールだ)

— From…凛

— Subject…お疲れ！

— もう家に着いたかな？

— 私は今ピアノの練習終わったよ♪

— えっと、それでね。7月21日にある

— 夏祭り何だけど…。一緒にどう？行かない？

— ダメならダメで大丈夫だからね(；・Δ・)

— それじゃあ、妹の癒ゆえ恵ちゃんにヨロシクね♪

(お祭りかあ。あの生真面目な凛きまじめが…、珍しいなあ。)

佐熊は、そんなことを思いつつ。頭の上でピンポーンッ！と電球が点いた見たいに

「あっ！」と言って手を1回叩いた。

(これって、もしかしてチャンスじゃないか！？うんうん、きつと凛が俺に興味を持って！)

佐熊は次第に顔をニヤつかせていった。

そして携帯メールの返信ボタンをピッ！と押した。

— T o .. 凜

— S u b j e c t .. R e .. お疲れ！

— T e x t ..

— 凜もお疲れ！

— 家にはまだ帰ってないよ。

— ちよっと近くのスーパーで買い物して来た。

— それと夏祭りの件。

— 丁度暇だし、行けるよ。

— 癒恵にもちゃんと伝えておく。

— それじゃ凜も早く帰りなよ。

-----

（送信っと！よし！帰るか。癒恵も帰ってる頃だろうし）

パチンと携帯を閉じて、黒色のリュックサックに携帯を入れて、再び背負った。

未だに顔をニヤつかせながら、佐熊は家路についたのだった。

**第1日目 寸陰を惜しむことなり（後書き）**

梅雨の夕焼け

——真っ赤に染まる景色。

少女の孤独。1番辛いのは誰？

## 第1日目 記念日（アニヴァーサリー）（前書き）

計算を試みよう。

$2+2-2-1$ ？

何の数字？ もしくは誰の数字だろうか？

## 第1日目 記念日（アニヴァーサリー）

真っ赤な夕焼け・・・だと思う。

何故曖昧な答えかと言うと、それは厚い雲が夕焼けを隠しているから。

佐熊は強くペダルをこいで自転車を走らせた。

段差や少し大きめな石を踏み進む度に、ゴソゴソッとビニールの買物袋が揺れた。

長い下り坂。自転車のスピードが上がる。両足を前方へ伸ばして、下り坂を下ってゆく。

頬に感じる生温い風。小さな虫が顔にペチペチと当たるのを感じた。何とも言えない爽快感が体をスルスルとすり抜けて行く。

佐熊は腕で顔を拭うと、相変わらず少しニヤケ気味の顔をした。

長い下り坂を下ると、再び自転車のペダルに両足を掛けた。

この長い下り坂を下ると家はもう少しだ。

脳内に想い浮ぶ、たった独りの妹の顔。

まだ11歳で可愛くて、元気のある小学6年生。

そして佐熊は家の前に到着した。

一軒家の、それなりに新しい家。二人暮らしには少し大きすぎる家だ。自転車を庭に停めて、一息ついた時の事だった。

——バチンッ！！

心臓がピタリと止まってしまうような打音が響いた。  
驚いてピタリと腕を止めた佐熊。

「っ！」

「はあ・・・はあ・・・」

「この悪魔がッ！お前の母親も父親も、あの女っばい兄貴も皆悪魔



なんだよッ！」

「——ッ！・・・うるさい。」

家のすぐ傍から聞こえた、子供の声。

1人の少女は息を切らしていた。もう1人の少年は声を荒げながら暴言を吐き散らした。

少女の声は、とても聞き覚えのある可愛らしい声だった。

「可哀想なヤツだな！親に恵まれてないなんて！授業参観にも、また背の小せえ兄貴がくんだろ？」

『可哀想”に！』

「・・・うるさい。うるさいッ！また殴られたいのっ！？」

「う、うわあああ！あ、悪魔めっ！」

咄嗟とつさに逃げていく足音。

少女は息を「ぜえ・・・ぜえ・・・」と切らしながら、こちらへ歩いて来る足音が聞こえる。

佐熊は、驚きのあまり身動きが取れなかった。

確かに俺は、男としては背が小さかった。身長162cmで、体重49kg。

それに女っぽい所も沢山合った。小さい頃に母親を亡くしたせいで、家事全般は全て佐熊の仕事だった。

時にはエプロンを着けたまま、癒恵ゆえの友達の前に出た時も合った。

思い当たる節は、沢山ある…。

それと癒恵が何故『悪魔』と言われているかという点、人並み超えた身体能力のせいだ。

足は馬のように速く、腕はコンクリートの壁を殴るとヒビが入る。

何故そんな身体能力が、癒恵に備わっているのかは未だに不明だ。癒恵はそんな自分の人並み外れた”力”を憎んでいた。

力のせいで、癒恵にはあまり友達が出来ないからだ。

ジャリッと地面を擦る音が聞こえた。

目の前には可愛い妹。黒髪サイドテールで、まだ幼さを帯びた黒い瞳が印象的な少女。

癒恵が泣きそうな顔をしながら立っていた。

「・・・お兄ちゃん。」

「・・・おかえり。・・・大丈夫か？」

困った顔をしつつ優しい声で問いかけた佐熊。

それに対して癒恵は、先程までの泣顔が嘘のように怖い顔をして佐熊を睨んだ。

「大丈夫？・・・大丈夫なわけじゃないじゃん！？何なの？そんな哀れんだ目でみて！」

「癒恵・・・。」

「何で私には、こんなお兄ちゃんしかいないのッ！？何で？どうしてママとパパがいないの！？」

何で私にはこんなに身体能力が良いの！？」

「落ち着いて・・・癒恵。さっきの子達にはちゃんとお兄ちゃんが先生に言ってあげるから。」

癒恵は小さな体を震わせながら、兄に向かって怒鳴り散らした。

佐熊は癒恵の小さな肩に右手を優しく添えた・・・けれど。

——パチンッ！！

「お兄ちゃん何て大ッ嫌いッ！いつもヘラヘラ笑ってさ・・・女っばいし、背も小さいし、弱そうだし。」

無駄に料理が上手いし・・・私ママの顔も・・・パパの顔もッ！何一つ覚えてないんだよ・・・？

どうして？ねえ、どうして？ズルいよ・・・お兄ちゃんだけ。覚えてるんでしょ？何もかもッ！」

「——いっつ・・・癒恵・・・男らしくないお兄ちゃんで、ごめんな。」

「——ッ！大ッ嫌いッ！」  
——ボタンッ！

癒恵は兄の弱々しい手を弾き飛ばし、再び罵声を浴びせた。  
少し強めに弾き飛ばされただけのその手は、真っ赤に腫れて次期に青く痣あざになっていった。

孤独さ故の不満。引かれた”数字”に満足のいかない癒恵は嘆き悲しんだ。

そんな癒恵に佐熊は無理やり笑顔を作って、いつも謝り続けていた。  
佐熊は確かに覚えていて。母の顔も父の顔も。手の温もりだって覚えていて。

けれども、癒恵は父と母が死んだショックで、父と母の記憶だけを自ら失くしてしまったのだ。

癒恵は家の扉を思い切り開いて、思い切りボタンッと閉じた。

佐熊は無言で立ち上がり、自転車の前カゴに乗せていた買い物袋をゴソッ！と両手で持ち上げた。

そして佐熊も家へ帰ったのだった。

その表情は何とも言えない悲しさと切なさを帯びていた。

蒸し暑い部屋……。二人暮しには広くて大きい二階建ての家。

静かな家に響き渡る心臓の鼓動音と時計の秒針。

無言で、せっせと冷蔵庫に食料品を入れて行った。

二人で食べようと思ったケーキ。

二人で飲もうと思ったオレンジジュース。

今となっては見る度に悲しくなっていた。

『こんな時、父さんと母さんがいたら……』

なんて思いながら、手を動かした。

冷蔵庫に食料品を入れ終わったら、佐熊は2階にある自分の部屋へと戻った。

静かな部屋にゆっくりと登る階段の音は、とても不気味に響いた。まるで、もう1人の自分が後ろからついて来ているようだ。

トン…トン…トン…

ボタン…

自分の部屋に入ると倒れるようにして佐熊はベッドに勢い良く、ボスンッ!と横たわった。

天井を見詰めながら、佐熊は思った。

(俺じゃ…駄目だよな。父さん…母さん…。俺、どうしたら良い?)

癒恵に寂しい想いをさせている事は重々わかっていた。

けれども俺がどれだけ頑張ろうとも、支えようとも。父さんと母さんにはなれない。

癒恵を満足させてやることは出来ないのだ。こんな俺じゃ駄目なんだ…。

佐熊は、泣く事もなく、ただ悲しい顔をしながら部屋の天井を見詰めて言った。

「ごめんな…、癒恵」

佐熊は思った。

癒恵を”可哀想”だと罵った子供たちのことを。

きっとあの子達は幸せなんだろうな。親に恵まれて、親の温もりがあつて。

——”憎たらしい”

何であんな良い子な癒恵が悲しまなくちゃいけないんだ?

何であんな愛しい癒恵が罵られなくちゃいけないんだ？

あいつらの幸福<sup>おや</sup>を奪<sup>あ</sup>いたい。いっそのこと、なくなってしまえば良い。

そして俺達と同じ気持ちを思い知ってほしい…。

「——きつと喜<sup>しあ</sup>嬉<sup>あ</sup>楽<sup>わ</sup>好<sup>せ</sup>なんだろうな。」

そんなことを考えていたら、不意に睡魔が佐熊を襲った。

佐熊は身を委ねるように、眠りについた——。

『ごめんね…。ごめんね…。』

夢の中で何度も謝る影が合った。

何故か悲しそうに、何度も謝り続けたのだ。

女性なのか？男性なのか？それすらも解らず、影が何度も涙を流しながら謝り続けた。

『ごめんね…。ごめんね…。独りにしてごめんね…。』

「独り…。？違うよ、俺は……。——。」

先程、癒恵に弾き飛ばされた手が、ズキンと痛んだ。

トントン

静かな音が部屋に響いた。

「お兄ちゃん…、さっきは取り乱してゴメン…。あ、あのさ。今日お兄ちゃんの誕生日だよね？」

私ね、さっきあんな事言っちゃったけど、本当は凄く感謝してるんだ。

だってお兄ちゃん毎日朝早く起きて、朝ご飯作ってくれてるし…。しかも美味しいし！

男らしいお兄ちゃんじゃ無いけどさ、私は好きだよ、お兄ちゃんのこと。

…さっきは、ごめんなさい。そして誕生日おめでとう、お兄ちゃん」

「お兄ちゃん…？さっきの手に貼る湿布しじふ持って来たんだけど、入って…良いよね？」

返事の無い兄。

妹が恐る恐るドアを開けると。

「お兄ちゃん…？何して…」

——そこには響き渡る静寂しかなかった。

「お兄ちゃん…？どこにいるの…？や…めてよ。隠れてるんでしょ？どこ？ねえ、どこ？」

妹は嫌な汗が滲み出てくるのを感じた。途端にクローゼットを開けたり、ベッドの下を

覗き込んだりした。

1階にいるのかな？と思い、勢い良く1階に降りた。

食器棚の裏、机の下、カーテンの裏、椅子の下。

思い当たる所を1つ1つ兄の名を何度も呼びながら探す妹。

気づけば息を切らしていた、心臓がトクトクと速くなって行くのを感じた。

静かな静かな部屋に響き渡る時計の秒針。

「佐熊お兄ちゃん…。ウソでしょ？ウ…。ソ何でしょ？やだ…ヤダヤダ！ヤダヤダヤダ！！」

まだ…まだ…、謝れて無いよ？…。」

「オニイチャ—ンツツッ！！！！！！」

響き渡る悲鳴のような叫び声。小刻みに震える幼く弱々しい身体。妹の瞳からはボロボロと大粒の涙が堕ちた。

嗚呼、神は人から奪うことしか出来ないのだろうか？

妹の視界が歪むのを感じた。

ピーーーーーー

煩い耳鳴りが妹を襲った。

その場に崩れるように倒れ伏した妹は床に頬をすり付けて啜り泣く  
しかなかった…。

——全てを失った少女のココロには何が残っているのだろうか？

筒巳 つつみ 佐熊 さくま 今日で17歳。

身長162cm 体重49kg 黒曜石のように美しい黒髪ショートヘアと黒い瞳。

ごく普通の高校2年生。夢は特に無し。自称『隠れ小説家』。

『——パパ、ママ。今日も世界は平和だよ。』  
わたし しあわせ

**第1日目 記念日（アニヴァーサリー）（後書き）**

『全では”少女”の思うが儘に——？』



## 第2日目 黄泉の客（前書き）

宗教、七つの大罪。

神、悪魔、天使。

全ては人間の空想から生まれた架空人物。

———この世界に不可能なんて在りはしない。

## 第2日目 黄泉の客

とある人物がピクリと身体を動かす。

不機嫌そうな顔。不満そうな内心。

「侵入者……」

ボソリと可愛らしい鈴の音のような小声で喋ると、重い腰を上げた。

とある人物の身体が動くと同時に、ふんわりとした黒い物体も一緒にゴソリと動いた。

髪は伸びて寝癖だらけのボサボサの真白い髪を、真っ白な両手でふさりと払い除けた。

そして無音で何も無い空間の、どこか遠い場所を見詰めるかのように上を見上げていた……。

ここには時計も食べ物も、何も無い。

ただ只管に真白い空間が広がっていた。

時計が無ければ秒針も聞こえやしない。聞こえるのは、己の生ノ証のみ。

ここは人らが作った世界。ここは神が壊した世界。

ここは少女の願で修正された世界。

侵入者など許しはしない。許すはずがない。

この世界は壊れている。狂っている。けれども、その世界を創り上げた人らも狂っている。

「嗚呼、はやく引かなきゃいけない。はやく消去しなければ、この世界の秩序が崩れちゃうから……」

無の空間に響く透き通った声。

この者にとって、秩序は絶対。

秩序を乱すことは決して許されない。秩序は”彼”そのモノだから……。

——カチ・・・カチ・・・カチ・・・

時計の秒針。ヒューと生暖かい風が頬を撫でる。

草木が風と共になびいた。鳥は鳴いて、川は陽を浴びて煌めいている。そんな森の奥に1人の少年が気持ち良さそうに眠っていた。

木々の隙間から差し込む光。風と共に揺れる草木が触れ合う音。とても気持ちの良い天気だ。

——すると

ブー！・・・ブー！・・・ブー！！

少年の頭の傍にある携帯が鳴り響いた。

少年はそれに気づき、不機嫌そうに目を閉じたまま、手探りで携帯を掴んだ。

顔の真上に携帯を持って来ると、眩しそうに薄目を開けて携帯を開いた。

——メールが一通届いております——

少年はメールBOXを開き、メールを確認。

From…凛りん

— Subject…ハッピーバースデー！

-----

— 17歳の誕生日オメデトウ！（。▽。）／

— 学校で言おうと思ったんだけど、色々と

— 忙しくて言えなかったんだ…（；・ω・）ごめん。

— 改めて誕生日おめでとう佐熊！

— それじゃあまた明日、学校でね。

メールを読み終わると佐熊は携帯をパチンと閉じて、ぼんやりと  
思った。

(そういえば：俺、誕生日だったんだなあ。：なのに)

「癒恵まだ怒ってるかな？」

「はあ」と佐熊は大きな溜息をついた。

少々沈黙が続く。

すると、いつの間にか佐熊の顔の隣に子リスが近づいて来ていた。

佐熊は寝ぼけながら子リスの存在に気づき、寝ぼけ顔を横へ向けた。

「ん、リス？わあゝ・・・かわいいなあ。」

優しい笑顔で佐熊は微笑んで言った。

けれど5秒後、ようやく異変に気がついた佐熊が、目を真ん丸く  
して

驚いた顔で勢いよく起き上がった。

そして再び子リスへと顔を向ける。

「な！ なっ！ なんて！ 家にリスがいるんだああああ！？ ゆ、ゆ・・・

・癒恵！ こ・・・

ここにリスがつっ！」

リスに指を指しながら、声を張り上げて佐熊は言った。

けれど返事は当然のごとく、返って来ることは無かった。

その佐熊の声に驚いた、近くの木に留まっていた鳥達が空へと飛  
んでゆき。

近くにいた子リスも、耳をピンツ！と立てて勢いよく逃げていった。

『おかしい』と思った佐熊は「癒恵？」と言って必死に周りを見  
回したが・・・。

「こ、此処・・・、世界だよ？」

沈黙が続く。佐熊は口をポカンと開いたまま、呆然と立っていた。風と共に揺らめく草木。先程まで生暖かった風が、今では不気味に思えた。

身体から滲み出てくる冷汗。行った事も無い場所にいると言う脱帽感。

それはまるで、無人島に1人残された気分だ。

次第に息が荒くなってゆく。心臓の鼓動が速くなっていく。

「はあ：はあ：。と、とりあえず携帯っ！」

そう言っ、勢いよく地面に置いてある携帯を見つけると、汗ばんだ手で勢いよく携帯を掴み、家へと電話したが…。

「ツー・・・ツー・・・ツー・・・」

鼓膜に響く音。佐熊は絶望した。

「電波が・・・ない。」

スルリと手から携帯が滑り落ちた。

佐熊は本能的に恐怖を感じた。

生唾をゴクリと飲み込んで、冷静に大きく深呼吸をした。

一瞬、身体の氣力が大きく抜けたが、すぐに氣力が戻った。

そして佐熊は冷静に周りを見回してみた。

：が、背が小さいせいで大木くらいしか見渡せなかった。

仕方なく佐熊は川の流れる音の方へと、恐る恐る行くことにしたのだった。

――サク：サク：サク：

歩いている内に気づいたこと…。動くとき意外と暑い。

歩いていて気づいたこと…。川が遠い…。

歩くこと10分…。川の流れる音が、もうすぐそこだとは思うの

だが、一向に川が見当たらない。

「うゝ・・・、暑い。」

運動不足な佐熊は、ワイシャツが汗まみれでビショビショになっていた。

歩いても、歩いても景色が一向に変わらず、雑草が隙間無く生えていて、木々が生い茂っていた。

木々の間から光が差し込み、風がとても心地良い。

右腕で額の汗を拭う。川が見つかり次第、飛び込みそうな勢いだ。すると何処からか嬉しい音が聞こえた。

——ジャッポン！ジャッポン！

子供が川の中で遊んでいる時のような音が聞こえた。

その音はとても近く、佐熊の顔に笑みが戻り音のする方へと走っていく。

——すると！！

燦然と輝く川が目の前に現れたのだ。

その川はとても綺麗で清んでいる透明度だった。

「はあ・・・はあ・・・！やっと思つたああああ！！」

佐熊は嬉しさのあまり裏返った声で言った。

そして佐熊は、制服を着ていることを忘れて、川に勢いよく子供のように飛び込んだのだ。

——ジャボンッ！！

水が勢いよく跳ね上がった。

とても気持ちが良い冷たさ。全身が水に包み込まれる爽快感に佐熊は包まれた。

すると近くから誰かの悲鳴が聞こえた。

「きゃあっ！だ、誰？」

その声に驚いた佐熊が声のした方を見てみると…。

そこには1人の女性が、洗濯籠を持って立っていた。

姿を見る限り女性の年齢は21歳くらいで、茶色のショートヘアで、前髪をバレッタで止めているのが印象的だ。

そして物凄い驚いた顔をしてこちらを見ていた。

佐熊も驚いた顔をして、勢いよく水面に落とした腰を持ち上げて、姿勢を正して女性を見た。

そして訳もわからず慌てて口を開いた。

「ご、ごめんなさいっ!!」

と佐熊は謝ったのだ。

まるで新人社員が、仕事でミスをしてしまった時に上司に頭を下げているようだ。

それに女性が「え？」と困惑したが、すぐに「ふふ」と笑ったみせた。

「面白い人ね。けど、悪い人じゃ無さそうで良かった。」

「ご、ごめんなさい…。とても暑かったもので…。」

「暑い？面白いこと言うのね。ここの温度は変わったりしないのよ？」

「え・・・？」

「え？って、だってここ天国よ？ここは太陽に近い場所だから暑いかもしれないけれど、慣れれば苦にはならないよ。」

「て・・・天国!？」

その言葉に驚いた佐熊が一步後ずさりをした。驚いて開いた口が塞がらない状態の佐熊。

すると、女性は佐熊の姿を、下から上へと眺めた。そして首を傾げながら言った。

「うーん、あなたまだ天国に来たばかりの人かな？なら驚いたり、暑がったりするのは当然ね。」

女性は「ふふふ」と可愛らしい笑顔で笑ってみせた。

佐熊はまだ混乱しながらも、その女性の言葉を理解しようと必死だった。

すると女性が佐熊に向けて、真っ白い手を差し伸べて言った。

「良かったら私の家に来ない？色々と案内するよ♪」

心臓がドキッ！と打ち鳴った。頭の中は未だに混乱状態だったが、このまま森を迷っていても

仕方がないと思った佐熊は、女性の手を取ったのだった。

（黒髪に黒い瞳。：珍しい人！今更だけれど、天国には黒髪に黒い瞳って人あまりいないなあ。

ふふふ。お父さんビックリしちゃうかな？）

『ウイルスが侵入しました。バグが発生しました。エラーが発生しました。初期化しますか？』

「初期化します」



## 第2日目 黄泉の客（後書き）

鳴らない携帯。

持って逝かれた数字

小さな数にでも、賭ける価値があるのなら…。

## 第2日目 エルシオン（前書き）

罪とは何だろう？

悪とは何だろう？

何が悪くて、何が良いのか。

それを決めるのは誰だろう。

## 第2日目 エルシオン

木々の葉の隙間から、じりじりと照っている太陽が暑い…。

制服は水だか汗だか解らない液で、びしょびしょだ。

川へ飛び込んだのは良かったものの、その後のことを全く考えていなかった佐熊さくまは、

先ほどの飛び込みを後悔しつつ、びしょびしょになった携帯を見詰めるながら思った。

（防水携帯でよかったあ…。）

そんなことを考えながら、道と言って良いのかどうか解らないような、雑草の生い茂った道を

先ほどの女性と佐熊は、3分くらい歩いていた。

佐熊は携帯をブレザーの前ポケットに入れて、ふと顔を上げて女性の後ろ姿を見た。

サラサラな茶色のショートヘアが、時々吹く微風そよかぜで優しく靡なびいていた。

白いワンピースに、白いエプロンを腰で結んでいた。

髪が短くて少しボーイッシュに見えるが、とても女の子らしい服装だった。

この暑い、気温38℃くらいはありそうな森の道を

清々しい後ろ姿で、汗も全くかかずに凜とした姿は、とても人間だとは思えない。

すると佐熊は、女性が先程言っていた”ここは天国よ？”と言う言葉を思い出してみた。

（”ここ”が彼女が言ったように、天国だとしたら彼女は死んでいて…こと…だよな？

ま、まあ俺もだけど…）

そんなことを、歩きながら点々と2分くらい考えていたら女性がふわりと後ろに振り返って

可愛らしい笑顔で言った。

「今更なんだけどさ、君、名前何て言うの？あ、私はね、ディルネ・リリスって言うの。」

（あ、やっぱり外国の人だったんだなあ。髪とか茶色だし、目何かスカイブルーだし。）

「えと…、すみません。まだ名乗って無かったですね。俺いや…僕は、筒巳 佐熊と言います。」

すると何故だか女性は、小難しそうな顔をして首を傾<sup>かし</sup>げてみせた。

「んー、何だか変わった名前ね？…まあそれは置いといて。ようこそ少年よ！

エルシオン城下街に到着でーす♪」

え？と思った佐熊はリリスの後ろを、そおーっと覗き込むように恐る恐る見てみると。

光が眩しく差し込んでいて、もう少し前に出てみると45cmくらいの壁に囲まれた街が見えていた。

真っ白なレンガ仕立ての街で、壁はもちろん家やお店も全てレンガで出来ていた。

街の住人達が着ている服も、白い服ばかりで、お城の騎士のような者達も

真っ白い鎧に包まれていた。

お城は、二段ベッドの二段目みたいな所にあり、そこは街よりもさらに厳重に守られていた。

真っ白い大きな壁に、頑丈そうな真っ白い門があり、街を監視するような塔が、正面に

2本建っていた。

お城は、その大きな壁と門によって全く見えなかった。

真っ白い物だらけの、この街を見ると何だか神々しさが感じられた。

無人島やら外国やらを通り越して、天使の住む街のようだった。

そんな中、佐熊だけが黒い制服に身を包んでおり、黒髪に黒い瞳。こんなにも真っ白な街に行けば、何もせずとも目立つことは間違いないだろう。

そんなことも気づかずに、佐熊は目をキラキラと輝かせていた。

「うわぁー！すごい真っ白ー！信じられないけどすごーい！！」

子供のように、はしゃいでいる佐熊。

リリスは、そんな佐熊の前に立って、腰に両手を当てて「えっへん」と自信満々に

「すごいでしょー！私も最初ここへ来た時は驚いたわ。何だかあなたを見ていると少し前の

私みたい。何だか新鮮な気分。」

と言って、「ふふふ」と笑ってみせた。

そしてリリスは佐熊の手を掴んで、「さぁ行こう！」と言った。

それに佐熊は胸を高鳴らせて、「はい！」と勢いよく頷いた。うなず

森から抜けた爽快感と、何だか新鮮な街の雰囲気。

手を掴んでくれている真っ白いリリスの手が温かくて、何だか安心した。

森から出たことで、暑さが増したはずだけれど、何だか不思議と暑さを感じなかった。

一時だけ、悩み事を忘れて佐熊はリリスに身を任せたのだった。

街に一歩足を入れたら、佐熊は何だか身体が一瞬硬直した。

動きが止まった勢いで、リリスは手を離れた。そして後ろを振り返って首を傾げた。

「・・・？どうしたの？」

佐熊は驚いた顔をしながら、自分の手を見詰めながら言った。

「あっ・・・いや、今何だか身体が・・・？」

佐熊は喋りながらゆっくりと顔を上げると、気がつけば街の人達が佐熊を鋭く睨んでいた。

それに何だか怖くなった佐熊は、一步後ずさりした。

未だにリリスは不思議そうな顔をしながら首を傾げていた。

リリスの後ろでは、お城の騎士と思われるような二人が陰悪そうな顔を見合わせながら話していた。

騎士は話終えたかと思うと、佐熊を怖い顔で睨みつけながら、ゆっくり歩いて近づいてきた。

本能的に逃げたくなる場面に直面している事は理解出来ているが、騎士たちの気迫に押しつぶされ

身体が動かなかった。

そして、ざわざわと聞こえて来た街の住人達の話し声。

（黒髪に黒い瞳・・・怖いねえ。）

（まさか本当に悪魔とか？）

（まさかあ。悪魔でも黒髪に黒い瞳は特別ランクなのよ？）

（ははっ、それじゃあアイツは”悪魔の王様”か？）

（それより：リリスよ。何であのリリスが悪魔みたいなのと一緒にいんだい？）

（騙されたのよ。アイツに。黒髪に黒い瞳なんて悪魔以外の何者でも無いわ。可哀想にリリス。）

（まあ！じゃあ、あの男は本当に悪魔なのねっ！？）

（まさかこんな所まで来るなんて：怖いわねえ。着ている服も真黒だわ）

（速く滅びないかなあ、アビス。）

（こら！そんなこと聞こえていたらどうするの！？ああ、恐ろしいっ！！）

胸の鼓動がバクバクと高鳴っている、それは先程の高鳴りとは全

く別物の恐怖だった。

怖い、怖い。悪魔やらアビスやら意味の解らない言葉が脳を行き交う。

そしてリリースまでもが、住人達の疑心暗鬼ぎしんあんきで疑われたり、哀れに想われたり…。

街の住人達が次第に殺気溢れる眼差しや、恐れを抱く眼差しを佐熊に向けた。

腕や足が、ガクガクと震える。人が怖い。ここは怖い。自分が一体何をしたと言うのだろうか？

リリースが住人達の話声を聞いて、顔を真っ青にして住人達の傍へ駆け寄って行った。

「うそでしょう？」とリリースは住人達へ問いかけたが、住人達は無言で目も合わせなかった。

佐熊は、唯嫌悪ただと言う名の憎しみに近い空気に押し殺されていた。騎士はとうとう佐熊の目の前まで来ていた。

そして騎士は、重い声色で言った。

「城まで来てもらおうか？」

身体の体温が、ガクンと一気に下がり再び元に戻る感覚。とても気持ちが悪いく。

吐きそうな気分だ。鳥肌が立ち、震えが止まらない。

騎士に腕を掴まれて、手錠らしきモノを着けられそうになった次の瞬間。

佐熊は咄嗟とつとに騎士の腕を弱々しい手で弾いた。

すると、騎士は物凄い怖い顔をした。

「貴様ああ—————!!!!」

大きな強い声で叫び、再び佐熊の弱々しい腕を思い切り強く掴んだ。

「いった…いつ。っ——！俺が一体何をしたって言うんですかっ！？」

思わず佐熊も震えた声で叫んだ。

だが、そんな叫びにも動じずに、ガシヤリと手錠を佐熊の手首につけた。

「白々しいな。黒髪に黒曜石のように不気味な黒目！疑いもしない、お前はアビスの王だろうッ！」

一瞬、佐熊は哀咽あいえつのあまり口を噤んだ：が、訳も解らないことを言われて黙っていられるわけが無い。

今度は強気な目つきで騎士を睨みつけ、佐熊は言った。

「何を言っているんだ！？俺はアビスの王とやらじゃないッ！！人違いだ！それに黒髪に黒目

なら日本に行けば、いくらでもいるだろう！？」

「黙れ！悪魔がっ！にほん？そっちこそ寝言は寝て言うんだなッ！」

佐熊は息を荒立てながら口論したが、騎士は一方的に罵声を浴びせた。

騎士は話を聞こうともせず、佐熊の手錠に縄なわをつけて、それを勢いよく引っ張った。

「う、うわっ！」

ゴツン！と前に綺麗に転んだ佐熊。

頭を強打し、足と顔を擦すりむいていた。

けれど、そんなことはお構いなしに騎士は、縄を引っ張って城へと向かっていったのだった。

ズリズリと佐熊は引きずられて、顔がレンガの地面に引きずられていたので立とうと思ったが、

騎士の歩くスピードがそれなりに速いせいで立ち上がれず、しょうがなく仰向けになった。

背中がゴリゴリと痛んだ。痛みに耐えながらも、横目で住人達やリスのことを見たが、目を合わせてくれなかった。

（うう：背中が痛い。地面熱いし…。これは夢なのかな。いいや、絶対夢であってほしい…。

…何だか眠い。すごく眠気が…。）



佐熊はゆつくりと薄れ行く意識の中、夢であることを祈りながら気絶したのだった。

天国から地獄へと突き落とされたかのような絶望感。

人から見放されたと言う悲しみ。今更気づく孤独。

誰も優しい眼差しでは決して見てくれはしなかった。

『天国』『悪魔』『アビス』『アビスの王』佐熊は知らないことが多すぎた。

滲み出る汗、背中の皮が少し剥けて血が滲み出ている。

恐怖と絶望と孤独が、佐熊を襲う。

身体は未だに震え続け、何故だか目頭が熱く感じた…。

一方、どこか真暗い部屋の片隅。

大きな椅子に座りながら、四角い液晶のようなモノを見詰めて微笑む者がいた。

表情をピクリとも変えずに、不気味に微笑み続けながら液晶の中の映像を観ていた。

（やっ…やっ…と、変化が訪れたか。嗚呼、だけど可哀想になあ。悪魔と間違われちゃって…。

痛そう…！クスクス。まあ変化が訪れたことを観れてよかった。日頃エルシオン観察を

していたのが正解だったな。それにしても黒髪に黒目かあ、興味深い。是非、時が動いたのなら

招待したいものだな。だがどう観てもこの優男が”時”を動かせる勇者になるなんて全く思えないな。やっぱ天使長サマサマに殺されて、そして時に飲み込まれて、

バッドエンド…か。クスクス。ん…いやちょっと待てよ？コイツら

の行動：いつもと違う？

否、難しいことは捨てておくでしょう。クスクス。）

そして彼は満面の笑みで、言い慣れた言葉を感情が籠もっていない声で称<sup>と</sup>えた。

「：今日も変化ナシかあ。何か面白いコトないかなあゝ！例えば天使長サマが死ぬとか♪クスクス。」

## 第2日目 エルシオン（後書き）

時計は歯車と歯車とが噛み合って動くもの。  
なら、時は何と何とがあって動くものなのだろうか？

## 第2日目 手足を措く所なし（前書き）

しゅそくをおくところなし。

ふあんで、ふあんでたまらない意。

「ひとりぼっちは。 」

## 第2日目 手足を措く所なし

触るとひんやりとする頑丈な鉄で出来た鉄格子<sup>てつこうし</sup>。

灯りが鉄格子の外に、ポツンポツンと灯っている薄暗い場所。

床がとても心地よい冷たさだった。この薄暗い部屋がとても心地よいと感じられるのは何故だろうか？

部屋には薄汚れた布と錆びた鉄で出来た2段ベットが2つある。

掛け布団は、あまりにも薄すぎて温もりなど感じられなかった。

トイレは無く、そこには外を見る窓も無い。薄暗く閉ざされた部屋だ。

そこに人がいた。1人は長い金髪に紅色の瞳。1人は黒髪に黒目。双方共、とても固い手錠<sup>てじょう</sup>を填め<sup>は</sup>られており。

とても厳しい警備で監視されていた。監視カメラのような球体がフヨフヨと浮かんでいる。

鉄格子の外には、警備員が心ここにあらずのような目で二人を見ていた。

1人は黒曜石のような黒目と黒蝶真珠のように潤いを帯びた黒髪。それに真っ白でボロボロになった、ただの布切れのような囚人服を着ていた。

もう1人は、昔は生気で満ちていたであろうと思われる、濁った血のような色をした赤い瞳に

手入れがされていないボソボソの金色の長い髪。

顔には、殴られたかのような青痣<sup>あおあざ</sup>が痛々しく残っていた。

容姿<sup>ようし</sup>は、28歳くらいの無精<sup>ぶしょう</sup>ひげが生えていて、少し老けて見える

男性だ。

服装はもう1人と同じく囚人服。

そして無精ひげを生やした男は冷静な顔で、床に横たわっている黒髪の男に近づいて、そこに

しゃがみこんだ。

しゃがみこむと同時に、痛んだ金色の髪がフサリと床についた。

警備員の視線が、双方へ厳しく向けられた。

それを気にせず無精ひげの男は、暗くて顔の見えない黒髪の男を<sup>も</sup>目視していた。

すると1人の警備員が、固く閉ざした口を開いた。

「気になるのかあ？」

人を見下すような声と口調で言う警備員。

その声に無精ひげの男は、顔を動かさず、目線も変えずに即答した。

「まあね。この一番警戒が厳しいS級処刑対象牢獄に、まさか新入りが来るとは思わないものでね？」

その男の声は、力強くて低音な声が優しく密封された部屋に響いた。

すると警備員は、自慢げな顔で答えた。

「そいつはなあ、悪魔…、いいんや！魔王だ！ハッハッハ驚いたか？」

なんとも憎たらしい口調で喋る警備員に、無精ひげの男は軽くあしらうように低音ボイスで

答えた。

「へえー、そうかい。それは凄いな。捕まえた奴はトップまで昇進か？」

「そいつがなあ、残念ながら俺じゃねえんだよなあ…。くそっ。」  
さっきまで意気揚々（いきようよう）としていたかと思えば、今度

は不満げな顔をしている警備員。

無精ひげの男が

（ずっとココを見張ってるだけのただの警備員なんだから当たり前だろう）などと思いつつ、1回瞬きをすると、少しだけ眉をひそめて言った。

「…こいつが魔王っていうのは、本当なのかい？どうもそうは見えないけど…？」

すると、警備員が持っていた槍を、無精ひげの男に向かって矛先を向けて振り下ろした。

そして、再び憎たらしい口調で言った。

「おい、ディスディアル。また痛めつけられたいのかあ？お前は黙っていれば良いんだよ。」

そう警備員が言うのと、槍をスッと上げて警備を続けた。

無精ひげの男、ディスディアルは何も言わずに、しゃがんでいた体制を崩し、そこに座った。

そしてディスディアルは瞳を閉じて、彼が目覚めるのを待つことにした。

彼は解っていたのか、それとも知らずに待ったのだろうか…？

そして、あれから風すらも入ってこない場所で1時間くらいたった頃。

朝だか昼だか夜だかも解らない牢獄に閉じ込められていた、黒髪黒目の男が寝返りをうった。

それに気がついたディスディアルは、閉じていた目を開けて、再び男を目視していた。

視線に気がついたのか？男はゆっくりと目を開けた。

「ん…こ…ここは…？」

男が喋った途端に、警備員は緊張をしているのか、生唾をゴクリと飲んで槍を強く握りしめた。

デイスディアルが無表情だった顔を、少し微笑まして男に言った。

「おはようさん、やっと起きたね。待ちくたびれて足が痺れちゃったよ。」

「えっ…！」

男は、その聞き覚えのない声を聞いて、驚いて体を起こそうとしたら…

「————いッ。」

「い？」

「い…、————いってええええ！！」

「おいおい、大丈夫か？どうしたんだ？」

体を起こすことは出来たが、男は体をうずまかせて痛みに耐えようとしていた。

そんな男の異変に気づいたデイスディアルは、男の背後に回って言った。

「んー、ちょっと背中みしてもらっても良いかい？」

「ぐぐぐ…、……。」

何も言わず、男は自分の身体に何が起こっているのか確認したい為、コクリと一回頷いた。

頷いたのを確認したら、デイスディアルは真剣な顔をしながら囚人服をそつとたくし上げた。

すると、男の背中には痣あざやら擦傷すりきずやら皮膚が焼けた痕あとがあった。小声でデイスディアルは「うわあゝ、こりや痛いわあ」と言った。

どうにかしてやりたいと思ったが、この牢獄には薬箱なんていう家庭的な物は無い。

かといって警備員に助けを求めても、笑われるか侮辱されるかのど



ちらかだけだった。

どうすることも出来ないデイスディアルは、唯<sup>ただ</sup>生々しい傷痕を見ていた。

すると、再び憎たらしい声が響いた。

「ああ！　そういやあ、コイツを捕まえた奴が城に入るまで、ずーっとコイツの事引きずって

来たらしいなあ。痣はどっかにぶつけて、皮膚が剥けたりしてんのは地面で剥けたんだろうなあ！

アッハッハッハッハ！」

そう言って警備員は笑い続けたが、そんな警備員をデイスディアルが殺気をこめて鋭く睨んだ。

すると警備員は身体をビクッ！と硬直させて目を逸らした。

デイスディアルは1回大きな溜息をつく、男の傷を見ながら「うん」と考え始めた。

けれど考えていたら、男が顔を後ろへ向けて少し震えた声で言った。

「もう…、大丈夫で…す。ありが…とうございます。」

「そうかい？　なら良いんだけどさ。」

そう言うと、デイスディアルは上げていた囚人服を下ろした。

そして男の正面にしゃがんで、優しい口調で言った。

「立てるかい？」

すると、うずくまっていた身体を元に戻して、顔を上げて男はデイスディアルの顔を見た。

赤黒い瞳に伸びきった金髪に無精ひげが生えた男。どうみても怪しかった。

怪しいと言うより、胡散臭い感じがした。

デイスディアルも、男の顔を見て一瞬だけ驚く素振りをしたが、再び真剣な顔になった。

そして、男がデイスディアルにコクリと頷いた。

男は立とうと、ゆっくり足を動かした。その足はふらふらしていて、今にも倒れそうだった。

「…よし、立てたか。それじゃ俺が腕かしてやるからベットの方まで行くぞ」

デイスディアルは、男の腕を掴んで自分の背中に回そうとしたが。

——バシンッ！

「ああっ！おいっ！」

「さ、触るなっ！って…うわああ」

ゴッソッ！

男がデイスディアルの手を弾いて、怯えながらも怖い顔で睨みつけた…が、その後体勢を崩して

コケたかと思ったら、牢獄の石壁に頭を思い切り強打したと同時に背中もぶつけて、

涙目になりながら再び身をうずくませて痛みに耐えていた。

「——っ！」

ディルディアルは、呆れた顔で「やれやれ」と言った。

「飼い犬に手を噛まれる、ではなく飼い犬に手を弾かれる…と言ったところか？」

「だっ！誰が犬だっ！」

男は、うずくまっていた身体をいきなり起こして、反発した。

デイスディアルは「ハハハハハ」と軽やかな声で笑っていた。

すると、ふと男は思った。

（あれ…俺なんでいきなり大声だしてるんだ？あれ…だって俺さっきまで…。）

もしかして俺はこの人に気を許してる…のかな？）

急に大声を出したせいかな、男は背中にギスギスと痛みを感じつつ目

をきよとんとして呆然としていた。

そんな男を見てデイスディアルは胡散臭い顔ながらも、優しく微笑んで魅せて男に問うた。

「俺はツヴァイツ・ガ・デイスディアルだ。デイスで良いぞ。そっちは？」

（長い名前だなあ。）とかと男は思いつつ答えた。

「あっ…！俺は筒巳つつみ 佐熊さくまって言います。」

佐熊は（こんな胡散臭い男に！）と本能的に敬語で話してしまったことを、少し後悔した。

「へえ。変わった名前だな。」

そのデイスディアルの言葉に、佐熊は身体がビクリと動いた。何故なら、少し前に同じフレーズ聞いたことがあるからだ。

そして、佐熊は冷静に答えた。

「そう…ですかね？」

そう顔を引きつらせながら言うと、デイスディアルがそれに気がついて首を傾げたが、再び

微笑んで言った。

「なんて呼んだら良いかい？ ツツ？ ミサク？」

（何故”ま”だけ抜けてるんだ！）と心の中でツツコミをしつつ、作り笑顔で答えた。

「えーっと、佐熊で良いです。」

「よし、それじゃあ佐熊。安心しろ、俺は佐熊の敵じゃないぞ。むしろ仲間だ。」

「え？」

後ろで警備員が笑っていたが、その声に耳をかさずにデイスの言葉を疑問に思った。

そして早く続きを聞きたいと、何故だか思った。

不安で不安でたまらなかった。けど、デイスは何だかとても優しくて、牢獄のこの薄暗さが安心

出来て何故だか、外にいた時よりも安心出来た。

「え？ じゃないだろう。ほら、あれだ。牢獄仲間ってやつだよ。」  
あまり良い響きじゃ無かったが、”仲間”と言う言葉に佐熊は少し安心感をもった。

そして、デイスは佐熊に手を伸ばした。

「ほら、いつまで尻餅ついてる気かい？」

「好きで尻餅ついてるわけじゃ……」

「そうかい。よいしょっと！」

佐熊はデイスの手を掴んで、引っ張ってもらった。

背中にピリピリッと痛みが走ったが、今は我慢しつつデイスに腕を持ってもらってベットまで連れて行ってもらった。

ベットに座ると、デイスがゆっくりと横に座ってきた。

——そして、佐熊は1度瞳を閉じて、大きく深呼吸をした。目を開けるとそこは、やっぱり現実で。

夢とかアニメの見すぎとかゲームのやりすぎとかでは無く。

ここが例え二次元であっても、そこがどこかの次元である限り、良くも悪くもそれが今の現実。

少し安心出来たからと言って、不安が消えた訳じゃない。

魔王扱いされて、色んなことを三次元に置いてきてしまっ

これからどうすれば良いかも解らず、最も牢獄の中だ。

出られる可能性はゼロに近い。

佐熊は色々なことを考えていたら、どうしたら良いか解らなくなっ

て何だか怖くなって来たのだ。  
例えるなら、ゲームを始めた途端に村にいたのは長老では無くラスボスだったとか、

洞窟を冒険していたら行き止まりになって、戻ろうとしたら来た道がオブジェクトによって塞がれてたり…。

——唯ゲームと違うのは『死んだらコンティニューは出来ない』と言うことだけ。

そんな佐熊の不安そうな顔を見て、デイスは気になっていた事が合ったので

半分真面目、半分冗談な気持ちで聞いた。

「なあ、佐熊って本当に悪魔や魔王の類たぐいなのかい？」

「——っ！違うッ！！」

先程まで床と睨めっこしていた顔が急にデイスに向いて、悲しい顔で拳をガクガク震わせながら怒鳴った。

「わわっ！ごめん、わかったから、そんなに何とも言えない顔で威嚇かくするなって！」

「威嚇！？いつまで犬扱いしてるんですか！」

「わあああ！わかったから！しっ！しいー！静かに！」

急にデイスに口を塞がれた佐熊。

まるで大きな声を出すと、敵に気づかれてしまうみたいだった。

佐熊は仕方なく、少し気を落ち着かせた。

すると、デイスがそーっと口を塞いでいた手を離して、辺りをキョロキョロと見回していた。

佐熊も何かあるのかな？と一緒にになってキョロキョロ見回したが、警備員と何回か目が合っただけだった。

そして、デイスは大きく溜息を吐いた。

佐熊はよく解らず。首を傾げてデイスに質問した。

「どうしたんですか？何で大声を出した後、周りを見回したんですか？」

デイスは、少し困ったかのような顔をしながら答えた。

「えっとな、落ち着いて聞いてくれ佐熊。ここはS級処刑対象牢獄って所で、俺たちは処刑対象なんだ。」

「んなっ！えーっと……、え？」

佐熊は『処刑対象』と言う言葉に、驚きのあまり言葉が出てこなかった。

「…今はゆっくり理解すれば良い。大丈夫かい？」

「……はい。」

「それでな、処刑対象の俺達は結局殺される確率が高いわけだから、何をしたって構わない。

そうゆう思考を持った兵士が多くて、大声を出したり何か兵士の気に食わないことをすると体罰を与えられる。」

「たい…ばっ…？」

「ああ。俺の顔に痣があるだろう？これはこの前俺が兵士のことを見てしまったのが原因で殴られた。」

「見ただけで！？そんな理不尽な…。」

「あ、だけどあそこに立ってる警備員は大抵のことは、しても大丈夫だ。警備員だからな。」

そう言って笑顔でデイスは笑った。

佐熊は、デイスの顔の痛々しい痣を今更ながら気づき、彼はもうどのくらいこの牢獄の中、1人で過ごして来たのだろうか？と疑問に思った。

（デイスはどうして…捕まってしまったのだろうか？何か悪いことを

したのかな？

そんな悪い人には見えないけど…。」

悲しげな顔をしながら佐熊はデイスの顔を見ていた。

すると、今まで「ハハハハ」と笑っていたデイスが佐熊の顔を見て、優しく微笑んで言った。

「そういえば、佐熊は悪魔や魔王の類いじゃ無いって言ってたけど、そしたら

何故髪や瞳が黒いのかい？」

笑いながら問い掛けるデイスは、優しく見えた。

けれど、急な質問で佐熊は戸惑った。

どうやらこの世界では、黒髪に黒い瞳はとても珍しいらしい。

佐熊は、どう答えたら良いか解らなかった。

この世界が今までいた佐熊たちの世界で無ければ、その世界の常識はこの世界には

——通用しない。

すなわ即ち信用してもらえないと言うこと。

そして、佐熊はデイスに聞いてみた。

「…、これから言うこと多分信じられないことばかりだと思います  
…。それでも信用して

くれますか？」

佐熊のその真剣な眼差しに、デイスは覚悟を決めるかのように1度深呼吸をして

大きく頷いて魅せた。

佐熊は今までのことを、デイスに話したのだ。

警備員も聞いている、カメラに監視もされているとわかっていたが、構わずに話した。

会って間もない胡散臭い男に、何故こんなにも話せるのか佐熊自身

も解らず。

唯、誰か：友達に愚痴を聞いてもらうような感覚で二人は話していたのだった。

愚痴にしては、あまりにも現実味がなくて、愚痴にしてはあまりにも深刻な内容だ。

けれども、デイスはちゃんと最後まで聞いていた。

どこか胸にずっしりと詰まった、重荷を吐き出すように佐熊は口を動かした。

デイスは時々「え？」と驚いたりはしたものの、ちゃんと最後まで聞いてくれていた。

——そして：

「なるほどね。もしそれが本当のことなら辻褄が合うね」

「本当ですよ。けど、これを今すぐに信用して理解しろって言う方が無理なのはわかっています。」

佐熊はそう言って、悲しい顔をして床を見つめた。

すると、デイスが佐熊の頭をポンポンと軽く叩いたかと思ったら、グシャグシャと頭を撫でた。

そして、優しい顔をしながら言った。

「あのねえ？ そんなに悲劇の主人公みたいな顔してないで、少し笑ったらどうかい？」

「：それを言うなら悲劇の主人公ではなく、悲劇のヒロインでしょう：？」

「佐熊は男だろう？ だから悲劇の主人公。」

「はあ：。」

そう言うときデイスは、佐熊の背中をポンポンと軽く叩いた。

すると、佐熊の背中にビリビリッと電流が走るかのような痛みを感じて、デイスを睨んだ。

デイスは「あぁっ！ 悪い悪い」と笑顔で言うとき、とても優しい口調で声で言った。



「それにな、俺は理解はしてないし出来ないから。――けど信用はしてる。」

「え・・・？」

「事は悪とか善じゃない。事は内容で佐熊がどう生きたか、それは信用に足るか？それが

全てだ。嘘とか本当とかは佐熊を見ればわかる。けど別世界とかそうゆう難しいのは俺は

理解出来ないからな。けど、俺はお前を”信用”している。」

佐熊は真剣で時々笑いながら語るデイスの顔を見ていたら、何だか目頭が熱くなって来た。

そう思った途端、瞳からは大粒の涙が零れ落ちていた。

それを「ハハハハハ」と笑いながらデイスは見ていた。

そして、デイスは悪そうな顔をして言った。

「ああ、それに犬は嘘つかないからな！ハハハハ」

「んなっ！いつまで犬扱いしてるんですか！！」

そんなことを話しながら、二人は笑いあっていた。

まだこの時間が続くと佐熊は信じながら笑っていた。

――最初は胡散臭い男だと思っていたが、話してみると意外と優しく暖かくて、とても居心地が良かった。

佐熊は思った。もし自分の父親が生きていたのなら、こんな人だったんじゃないかな？と……。

ここは処刑対象人物がいる場所。

大罪を犯した罪深き者がいる場所。

捕まったら”最後”、二度とは出られない。

”彼”もまたしかり、”彼方”もまたしかり。

・・・けれど、時は止まっている。

———唯そこを永遠にループするだけ。

それは不幸？それとも幸福？その中間の

『不幸中の幸い』

とでも言っておくべきなのだろうか？

## 第2日目 手足を措く所なし（後書き）

最後まで読んで頂き幸いです。

何だかそれなりに、いつもより文字数が多くなってしまったような気がします。

一応牢獄編？は二話で完結する予定です。

## 第2日目 鴉は何故泣くの？（前書き）

自分が無力だった場合、どうしたら良いのでしょうか？

例えば、目の前に崖から落ちそうな女性がいます。

助けますか？助けられますか？

貴方に1人の人間を持ち上げる腕力が無いとしたら、どうしますか？  
結末は…、絶望でしかない。

## 第2日目 鴉は何故泣くの？

静かな牢獄。静かに揺れている松明たいまつの炎。

一見、なんの変哲もないただの牢獄に見えるだろうけれど、色んなモノによって監視されている場所。

そこが、「S級処刑対象牢獄」一度捕まったら、二度と空を拝むことは出来ないと言われている場所。

その牢獄で過ごす時間は、過ごした者にしか理解出来ない。

人々は唯ただ、虚構きょこうを語る。

『——その牢獄に閉じ込められた者は、絶望しながら息絶えて行くことでしょう……』と。

「なあ。佐熊？」

静かな牢獄に響いた一声。その声は重く低音でとても落ち着く声で、密封された部屋に響きわたった。

その男に呼ばれた佐熊さくまは、どう見ても衛生的では無いボロボロなベッドの上に座りながら答えた。

「うん、何？デイス」

佐熊の声は、落ち着いた声をしていた。だけど、どこか寂しげな声をしていた。

——デイスと呼ばれた男は、長いボサボサの金髪をサラリと後ろに退かして、どこか遠い所を見上げるように目を逸らしながら言った。

「今更：な感じもするんだけど、実は俺ね、今日処刑日なんだわ」  
佐熊はその言葉に身体が硬直した。また冗談かな？と疑心暗鬼しつつ、佐熊は口を恐る恐る開いた。

「それって……、本当なのですか？嘘ですよね？だって……！俺達まだ会ったばかりじゃないですか！」

「俺達：はね。俺はこの牢獄と出会って16年。そんな長い年月じゃないけど、重罪人をそんな長らく生かしとくつもり無いとは思わないかい？三日前ぐらいに告げられたのだよ。」

「16年！？えっ：でも：どうしてなのですか！？」

理解出来ずに、佐熊はボスンッ！とベッドを思い切り叩いた。

その反動で、背中の傷がズキズキと痛み、ベッドに付着していた埃ほこりが舞っていた。けれど、そんなことも気にせずにデイスのことを睨んだ。

デイスはその視線に気づき、佐熊を見て悲しそうな声にも聞こえたが、どこか嬉しそうに言った。

「どうしてって言われてもねえ。でもね、俺はね、今日佐熊に出会えて良かったって思っている。佐熊もそう思わないかい？この16年間俺はずっとずっと1人だった。牢の外に大事なモン残したままで、不安で仕方が無かった。けど、佐熊は来てくれた。罪でもない罪を背負ってね。嬉しいよ。：：：なんでそんなに今にも泣きそうな顔をしているのかい？」

佐熊は一度、目をギュッと閉じた。自分の無力さを嘆くように顔を俯うつむけた。

どうしても信じられない真実。虚構であってほしいと願うが、現実是不変ならない。

『――祈っただけで、世界が変わるならきつと争いごとなんて起きない。

祈っただけで、人の命が救えたり、永久になったりするならきつと誰も悲しまない。

じゃあ、祈りとは何の為にあるのだろう？神様は何を叶えてくれるのだろう？

過ぎていくのは無口な時間だけ――』

時間は過ぎていった。だが、牢獄の中では正確な時間はわからない。

閉ざされた部屋の中じゃ、外の景色も見えなかった。

唯、二人の男はあれから一言も言葉を交わさずに、残された時間を過ごした。

すると、左の方から重々しい足音が聞こえてきたのだ。

ガッシャン！ガッシャン！と大きな音が、一歩一歩聞こえて来る。

迫り来るその音に、恐怖や絶望を隠さずにはいられなかった。

けれど、デイスはとても冷静だった。1回大きく深呼吸をしてその時を待っていた。

恐れは無いのか？それとも恐れすぎて開き直ってしまったのだろうか？

「行かないでほしい」と言えたらどんなに楽だろう。

「行かないでほしい」と言ったらデイスはどんな顔をしてどんな反応をするだろう？

けれど、佐熊は言えなかった。言った所で結局何も変わらないと思っていたから。

『臆病な私を許してください……。』

——そして、その時は来た。

鎧を着けていて顔の見えない厳いかつい国の兵士が、鉄格子を挟んで立っていた。

真白な鎧で、人間ではなく天使だと思われるこの世の人型の生物。

けれど、今の佐熊には傲慢で野蛮な悪魔にしか見えなかった。

傲慢な悪魔では無いと言うのなら、偽善者天使フェイクとでも言えようか。

ゆっくり開こうとしている冷たい鉄格子の扉。

そうこう考えている内にも時間は過ぎ去っていく。

別れの時間も待ってはくれない。

佐熊は願った。最後には神に頼るほか無いと思った佐熊は泣きそうな顔をしながら願った。

（神様、時間を止めて下さい！お願いします！デイスが：デイスがっ！！！！）

「さあ、ツヴァイツ・ガ・デイスディアル：立て。」

ドスのきいた野太い声が響いた。佐熊はその声に驚き体をビクリと震わせた。

落ち着いている真白い騎士たち。  
まるで人形のようなだった。

デイスは、一度佐熊のことを見て「じゃあな」と穏やかな笑顔で言  
って、鉄格子の外へ軽い足取りで向かって行った。

それを見ていた佐熊は、まるで傍観者のような気持ちになった。

唯一人の男が処刑されようとしている。ただそれだけだった。

頭の中がブルー画面のパソコンのようだ。

絶望感と、どうしたら良いかわからない無力感。

自分1人では結局なにかをすることは不可能だと思い知らされるよう  
うだった。

——それでも、時間は止まりわしない。

カチッ…！

重々しい音をたてながら鉄格子の扉が閉まっていった。

その音と共に、佐熊は途方も無い脱力感の中、考えた。

『何故デイスが処刑されなければならなかったのか。デイスが何を  
をしたというのか？』

頭の中が、疑問だけを残して他のモノは除外された。

頭に漂う1つの疑問が交差して、そのすぐ後に怒りみたいなものが  
立ち込めてきた。

すると鉄格子の扉が閉まったと共に、佐熊は何かがプツンと切れ  
たかのように歯をグッ！と噛み締めて、怖い顔をして鉄格子の間か  
らデイスのボロボロな囚人服に手を掛けた。



そして、息を思い切り吸って怒鳴ろうとした瞬間……!!

『——じか　を……はや　…、うご　し　くれ…助けてくれ……!!』  
「…え？」

「何だ！貴様！今すぐ殺されたいのか？」

ドスンッ！

「う、うわっ!!」

一瞬の出来事だった。佐熊はデイスの服に手を掛けた時に、聞き取りにくい声が聞こえた。

はつきりと聞こえたのは『助けてくれ』と言う一言だけだった。

その声は、震えて怯えたような声で、聞こえた後すぐに騎士に突き飛ばされた。

佐熊は再び頭が混乱して茫然としていた。

そんな佐熊のことをデイスは驚いた顔で見ていた。

（——あの声は…、確かにデイスだった。で、でも何か様子がおかしかったような…？動揺みたいなの…？）

あー！動揺してるのは俺かっ!!）

すると、デイスが落ち着いた顔と穏やかで優しい声で言った。

「…佐熊、これも何かの縁だと思わないかい？最後に1つ教えてやるよ。」

「…？」

「俺は、16年前の第3次火水雷土闇光大戦から逃げたんだ。それで捕まったってこと。」

「わかるかい？俺は戦争から逃げたんだ。家族を守りたい一心に。」  
「え…。」

「この国の騎士や女王は非常で無常だ。ガイザ…、10才にも満たない息子を戦場に出ろと強要されたんだ。息子を出さなければ、当時妊娠していた妻に戦場に出ろと言ってきやがったんだ。」

それが許せなくてな…。まあそうゆうことだ。わかったかい？佐熊。

」

佐熊は何も言わずに、涙ぐんだ顔でコクリと頷いた。

それでも、何故逃げただけでこんなに厳しい処罰が下されるのだろうかと、佐熊はどこか許すことの

出来ない感情が込み上げて来た。それは憎しみのような感情のようだった。

ダンッ！

何ともいえない空気を壊したのは、騎士がデイスの背中を思い切り蹴飛ばした音だった。

「っ…！ゲホッ…。」

重い純銀のような鎧の靴で蹴飛ばされたデイスは、膝を床に着いて顔を歪ませて吐血した。

その血は、鮮血とまでは言わない、どす黒い色をした血だった。

佐熊は口を半開きにしたまま、啞然とした顔でソレを見ていた。

そして…、デイスは引きずられるように引っ張られて行ったのだった。

残ったのは、何も出来なかった佐熊と、居るだけで虫唾が走るような警備員1人。

佐熊は尻餅をつきながら、今まで溜め込んでいたものを、思い切り吐き出すかのように

叫び喚いて泣いた。

「あゝあゝあゝあゝあああああああああああああゝ！

！！」

何も出来なかった自分が許せなくて、騎士やこの王国の女王さえも許せないと思えた。

いくら自己嫌悪しても、状況は何にも変わりはしなかった。

血が滲むくらい佐熊は、自分の唇を噛み締めた…。

——その晩、佐熊は感覚が無くなるまで騎士たちに殴られ続けられた。

そして、またリセットされる。

## 第2日目 鴉は何故泣くの？（後書き）

長らく更新を疎かにしてしまい  
大変申し訳ございませんでした。

そして、この牢獄編はこの話で終わりにしようと  
告知していたのですが、思っていたより長くなってしまっ  
て…。後2話くらい延長する予定です…。  
申し訳ございません。

それと、牢獄編が終わり次第、キャラクター紹介みたいな物を挟  
みたいと思います。では、最後までご覧頂きありがとうございます  
！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9734t/>

---

エレメンタル・バスターズ

2011年11月5日15時15分発行